

平成二十八年十一月一日発行 第二十六巻第十一号 通巻第三〇五号 毎月一回 林発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

平成28年11月号

岡井省二創刊

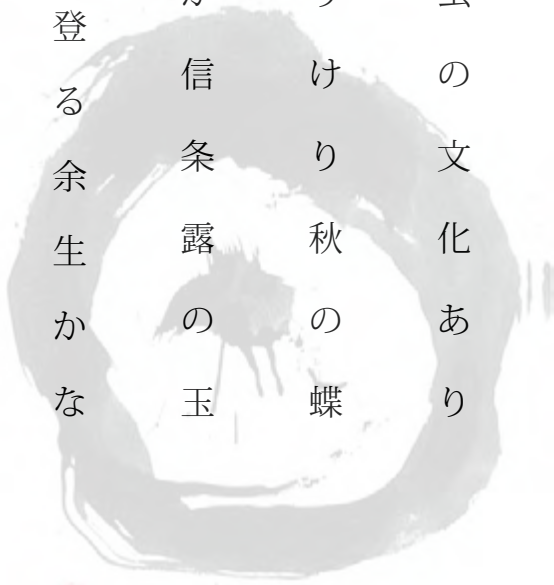


蚊帳

高橋将夫

伝説の初めに桃が流れくる
怪し火がちちろの闇をなめてをり
台風を中心にをる弥陀如来
待つことを楽しみながら四番

人の道横切つて蛇穴に入る
心にも質量ありぬ鱒雲
茶立虫虫にも虫の文化あり
まつ白な命なりけり秋の蝶
微動だにせぬが信条露の玉
より遠く高きに登る余生かな



槐安集

水野恒彦

日白き黙に何問うきりぎりす
秋蟬のこゑほど遠きものはなし
鰯雲こころに赤き起伏あり
石人は動かざるもの冷まじや
月山の底より蚯蚓鳴きにけり

加藤みき

大花野にころびて種を拾ひたる
鞍馬山の龍笛のこゑ星月夜
秋出水プランクトンと豊穣と
小鳥来るどの敗者にも勝者にも
蝸やへ理屈も小理屈もなし

中島陽華

行人たひびとに惚れつちまへば杏かな
梅干の恋や湯引の鱧おとし
肱の雨呑んだる鱧の湯引かな
夕涼や人力車つぽ二人乗
日が落ちるぐつぐつ虎魚焚いてをり

竹内悦子

鬼灯にまだ灯のつかぬ青さかな
顔ぢゆうに風吹いて来し鳩の湖
風鈴や舌の機嫌の良き日なり
蒲の鉾こんなとこころに鞠ひとつ
籐椅子の凹みにありし三国志



雨村敏子

錦絵の猫が飛び出す大暑かな
冷奴つぶし湖広ごれる
無花果の五つが箱に笑ひける
踊の輪果てて地熱のなほ熱し
立秋の影となりたる松大樹

本多俊子

精霊といふものありぬ遠花火
しんかんと真水のかをり水芭蕉
風入れやときには愛の匂ふもの
葉鶏頭晩年ほのと燃したく
撫子の書よみの余白にあるこころ

近藤喜子

放心の頭中ひろがる浅茅原
蓑虫の蓑ぬがんとす日の匂ひ
応ふなら明快ならむ鶏頭花
たましひは何処に種のなき葡萄
一度のみ流さるるなら天の川

瀬川公馨

百日紅の誰が寵姫か手弱女か
面取りのボンボニエールに楊梅
氷裂文の小皿の並ぶ夏座敷
お手並の同工異曲の梨であり
炎昼やわらひに顎はずれたる

久保東海司

点となり光となりて揚雲雀
虹の橋渡りたき子の瞳かな
滝壺に入りし眞言唱ふ人
ちぎり絵に似し無人駅柿すだれ
梅雨蝶の梵鐘の余韻いだきゆく

柳川 晋

復活と再生産と今朝の秋
心中に夏館持つ人なりし
脇役が主役を選ぶ薯預汁
息吸つて止めて弾ける大火花
天地の色を続べたる風の色

熊川暁子

流灯の闇を小分けにさきつおや
落蟬の四肢をたためる禱りかな
萬緑や水玉青き無量光
あふち咲きけぶるが如く人逝けり
蛇の道は千草の隠す道なりし

寺田すず江

くぐもりて鳩吹く音の涉りゆく
ゆく夏の落日大き海の鳴る
万物を黄金に染めし大夕焼
銀漢をあふぎ詩人となりゆけり
ひと夏の恋の終りぬ浜風に

岩下芳子

ここからは日傘を畳む手向山
古酒新酒キープボトルの主の名
新米を研ぐやはらかき掌
青柿のうつかり落ちてしまひけり
其所此所に蜻蛉来てゐる地鎮祭

近藤紀子

帰省子と遊び呆けてしまひけり
雷遠し仔犬の頭撫でてをる
蝸のシャワー浴びつつ沓掛へ
女鵜匠腰蓑さやかにあらはれし
鵜飼火の届かぬ静寂ありにけり

岩月優美子

秋暑し唇重くなりけり
蜉蝣のあまたの魂の漂へり
秋の風未知の扉を開けて来る
山霧やカルスト台地総嘗めに
流星のその一瞬を疑はず

竹中一花

少年の連れ来し秋の女神かな
法螺貝の音うり坊の山に入る
神坐す船形石や水澄めり
踊の手河内音頭にせかさるる
六道参りあの世この世のがやがやと

前田美恵子

確信の的を得たるやさはやかに
新豆腐夫婦の会話短かくて
古着屋の色まぢまぢや秋暑し
山羊二匹放たれてをり草の花
転がりて鹿火屋に錫の弁当箱

中田禎子

夏山の力増す碧迫りくる
炎帝や乾上がる魂のありにける
国境なき海神の国桃流るる
霧深し呼ぶこゑを待つ巡視船
山頭火忌中突堤を杖一本



槐市集

有松洋子

この星に傷口あまたカンナ炎ゆ
一適のこゑを惜しまず秋の蟬
鬼やんま鋼の意志で宙に生く
すこしやつれてしまつた秋の海
いま過ぎし風に秋色みつれたり

犬塚芳子

寝て起きてやすらかな暮し晩夏かな
生かされて八月六日今がある
三日月も花火に負けず輝きて
花の蜜とりては戻り夏の蝶
あれこれと知らずにすぎて葉月かな

犬塚李里子

天網恢恢野百合の多さばにひらきけり
ちちははの通りすぎゆく秋夕焼
醉芙蓉風の行手に君の影
雁あまた幻の水尾宙に曳き
病名を触れずに来たり弟おとぎり切草

井上静子

いつまでも覚えてをるや盆踊
遠目にも義太夫の汗思はるる
美人画の前で団扇の手を止める
秋桜挟み将棋の泣き笑ひ
糸電話廊下の向かう地虫鳴く



今井 充子

海の日に山の日はへ土用干し
薬局の入口見上げ燕の子
をちこちの囃子あまたの酷暑かな
青紫蘇や畑の真中占領す
子子のニクロム線の効聴いて

岩田 洋子

師の石碑花野の風のくるところ
破れても背筋正しき蓮なる
金星やすすき一束抱きをる
酢飯の酢の効き過ぎし大暑なる
人の道のならぬところに蛇の道

江島 照美

少女から女への道酔芙蓉
花茗荷清貧といふ夢ありし
リオ五輪勝者にもある秋思かな
墓洗ふ父の分骨せし墓を
父の背は赤銅色に夏の海

岡田 桃子

特急通過後の鈍行炎昼へ
雲の峰抜けむ前傾ペダル漕ぐ
胡瓜切る今日の機嫌のいかがなる
無花果を挽ぎし右手や乳走る
音立ててて二百十日の朝の風

荻 布 貢

手弱女の指の流れや風の盆
音を消し鱈を狙ふ小舟かな
天高し肉食系の女子五輪
線香燗の火を絶やさずに夜の秋
新涼や法事の読経透きとほる

久保 夢 女

雲の峰小手をかざして初登頂
リボン褪す父愛用の麦藁帽
御住職暑さウルトラCですね
盆踊りヤッサのホイで締めにけり
熱帯夜しばらく膝を抱へけり

槐集

高橋将夫選

白粉の花の向こうに私がいる 大阪 江島 照美

こはばりし秋蝶にのる秋の蝶
糸蜻蛉見え隠れする記憶かな

一葉落ちまた一葉落ち捨て身なり
挽ぎたての青々しさよ夏の空

いつぼんの木に啼く蟬と空蟬と 岡崎 犬塚李里子

底紅の天に触れざるまま散れり

日没の速さ尾花に急かさるる

金色の尾をまなうらに穴惑ひ

縋る木に己を委せ天牛よ

蒼天や八月の詩は死者が書く 大阪 有松 洋子

白湯一口身に沁み透る原爆忌

西方へ雲は流るる大文字

わが指紋つけし秋蝶空へ消ゆ

三日月が刃こぼれしたり虚無を切り

秋の風そよと命をはこびくる 岡崎 柴田 靖子

すぎたれば良きも悪しきも秋思かな
心の襞のときがたく迢空忌

ゆふがほのゆるりと闇を吸ひに行く
夜の更けて満月の声澄みわたる

ものの翳濃くみゆるなり秋はじめ 吉田 順子

鬼やんまつかめば鼓動手にひびく

底紅やひと日の花の愁ひあり

鰯雲うしろに大魚ひそみぬて

山の日のしみじみと差し吾亦紅

地を蹴つて踊る阿呆となりにけり 竹原 久保 夢女

踊の輪解けて踊り子闇に入る

異界への道撫子が道しるべ

生と死は仲良く同居盆説法

信心とは投げ掛けられて百合白し

銀河往来

高橋将夫

◆槐集観照

白粉の花の向こう側に自分を見たという。白粉花には紅、白

黄などがあり、可憐な花である。種子の中に白い粉があり、子供達が白粉のようにしてその粉で遊んだ。作者はそんな子供の頃の姿をそこに見たのかもしれない。白粉花から私が受けた印象は大人の女性。白粉花にはよい香りがある。いろんな「私」を想像することが許されると思う。

〈一葉落ちまた一葉落ち捨て身なり〉の句、「捨て身」が作者ならではの視点。「桐一葉」の持つ古典的情趣から脱皮している。〈こははりし秋蝶にのる秋の蝶〉の句、まるでこわばった蝶との別れを惜しむかのようである。秋蝶にそんな気はないだろうからなおさら切ない。エロス（愛、生）の本質に迫る。

いつぼんの木に啼く蟬と空蟬と 犬塚李里子
一本の木に蟬の抜け殻と生きた蟬がいて、その下には落蟬が
いるのだろう。誕生と生死は自然の摂理。

〈継る木に口を委せ天牛よ〉、〈底紅の天に触れざるまま散れり〉
〈日没の速き尾花に急かさるる〉、どの句も作者の心の風景を穏
やかに描いている。

蒼天や八月の詩は死者が書く 有松 洋子
八月は終戦の月、原爆が投下された月。戦死や被爆に関連する
記事も多くなる。それらは戦死者や被爆者が書かせたものと言
えよう。蒼天はそれらの死者が安らかに眠る場だと思ふ。
〈わが指紋つけし秋蝶空へ消ゆ〉の「作者の刻印が刻まれた秋蝶」

や、〈三日月が刃こぼれしたり虚無を切り〉の「虚無を切った刃こぼれ」は作者ならではの感性。

ゆうがおのゆるりと闇を吸ひに行く 柴田 靖子

夕顔が闇に溶け込んでゆく様子が鮮明に浮かんでくる。
〈秋の風そよと命をはこびくる〉で夏バテも吹き飛んだ。

鰯雲うしろに大魚ひそみぬて 吉田 順子

秋天に浮かぶ鰯雲の後ろに大魚が潜むとは実にユニークな発想。秋天という海に浮かぶ鰯雲であつてみれば、後ろにそれを捕食する大魚がいてもおかしくない。俳諧。

踊の輪解けて踊り子闇に入る 久保 夢女

踊の輪とその周辺の明暗がくつきりと浮かび上がる。闇に入る踊り子が祭りの後に似た寂しさを感じさせる。

雪解富士天地ふれあふ風の音 高野 昌代

天と地の間を吹く風。その風音はまるで天地が触れ合う音のようだと言ふ。雪解富士を中心に据えて雄大な景を描いている。これぞ立句。

〈花槿わが一すじの道灯す〉は「槐」にとつて何よりの一句。

弥陀仏と眼の合ふ刹那いと涼し 平野 多聞

弥陀仏と眼が合つて何かひらめくものがあったのかもしれない。「涼し」だから爽やかな心境なのだろう。

〈大花火笑顔のパンダ消えそびれ〉、このころは花火の種類も増えて、パンダの顔の花火があるというから、アンパンマンの花火も見られるかもしれない。〈以下略〉